

## 心の垣根

ごみ当番の日、ごみ集積場に立っていると、外国の人が、ごみを出しにきました。袋の中には燃えるごみやナイロン、ペットボトル等が分別されずに入っているようでした。「ルールを守ってもらわないと困るなあ。けれど話をしたこともない人だし、外国人だし、日本語も通じるのかな？」と思い、私が迷っている間に、ごみを置いて、帰ってしまわれました。

私は、ごみ袋をそのままにしておくわけにもいかず、仕方なく分別して片付けました。

次のゴミ当番の日、あの外国の人が、ごみ袋をもって歩いてきました。今回も分別されていないようです。私は、今度こそ伝えようと意を決して話しかけました。

「あの、ちょっと・・・」

「ハイ。コンニチハ。」

片言の日本語が返ってきたので少し安心して、

「ごみは種類ごとに、分けて出すルールになっているのですよ。」

「アッ、ゴメンナサイ。ルール、ヨクワカリマセン。」

「今日は燃えるごみ。空き缶は明日です。」

と、ごみを示しながら、伝えと、ウンウンとうなずきながら話を聞いてくれました。

「わからなかったのだから仕方ないですよ。これからは、分からない事があつたら聞いてくださいね。」

「アリガトウ。ゴザイマス。ワタシ、アトイマス。ヨロシク。」

このことがきっかけでAさんと話をするうちに、Aさんが信仰深く、代々伝わる厳しい決まり事をしっかり守って生活していることや日本に福祉の勉強をしに来たこと、そして、習ったことを自分の国でも広げていきたいと考えていること等を教えてもらいました。そして、ごみのルールもAさんの国の言葉で書かれたごみカレンダーがなく、教えてくれる友達もいなかったのも、よく分からず困っていたことを知りました。Aさんが外国人という理由で距離をおいていた私たちが、Aさんを困らせていたことに気づきました。

そんな中、町内の文化祭で私はAさんに、祖国の鶏肉料理を模擬店で出すことを提案しました。

「こりゃおいしいね。この味付けは、新発見だね。」

Aさんの料理は大好評で、お店は大盛況でした。笑顔でAさんに話しかけてくる人もいて、地域の人々との心の垣根が取り払われるような、暖かな空気につつまれていました。

日本では、外国の人たちと共に生活していく場面が増えています。お互いが気持ちよく暮らしていくには、互いに心の扉を開き、話をしていくことが大切なんだと感じた出来事でした。